

西鶴集上



日本古典文學

日本古典文學大系 47

西鶴集上

V

岩波書店刊行

昭和 32 年 11 月 5 日 第 1 刷 発行 ©  
昭和 51 年 4 月 20 日 第 19 刷 発行

定価 2100 円



|       |                                        |
|-------|----------------------------------------|
| 校 注 者 | 麻 生 磯 次<br>板 坂 元<br>堤 精 二              |
| 発 行 者 | 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5<br>岩 波 雄 二 郎 |
| 印 刷 者 | 東 京 都 青 梅 市 根 ケ 布 1-385<br>白 井 倉 之 助   |

発 行 所 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5 株 式 会 社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 目次

|    |   |
|----|---|
| 凡例 | 三 |
| 解説 | 三 |

## 好色一代男

|    |     |
|----|-----|
| 卷一 | 三七  |
| 卷二 | 五九  |
| 卷三 | 八   |
| 卷四 | 一〇五 |
| 卷五 | 一三七 |
| 卷六 | 一四九 |
| 卷七 | 一七三 |
| 卷八 | 一九九 |

好色五人女

卷一 ..... 二九

卷二 ..... 二二七

卷三 ..... 二五九

卷四 ..... 二八一

卷五 ..... 三〇三

好色一代女

卷一 ..... 三五

卷二 ..... 三四九

卷三 ..... 三七一

卷四 ..... 三九三

卷五 ..... 四一三

卷六 ..... 四三三

補注 ..... 四五五

## 解 説

西鶴の伝記を考える場合に、問題になるのは、藤村作博士によって紹介された伊藤梅宇の「見聞談叢」巻六の記事である。

貞享元禄ノ頃、撰ノ大坂津ニ、平山藤五ト云フ町人アリ。有徳ナルモノナレルガ、妻モハヤク死シ、一女アレドモ盲目、ソレモ死セリ。名跡ヲ手代ニユヅリテ、僧ニモナラズ世間ヲ自由ニクラシ、行脚同事ニテ頭陀ヲカケ、半年程諸方ヲ巡リテハ宿ヘ帰り、甚誹諧ヲコロミテ一品ヲシタヒ、後ニハ流義モ自己ノ流義ニナリ、名ヲ西鶴ト改メ、永代蔵、又ハ西ノ海、又ハ世上四民雛形ナド云フ書ヲ作レルモノナリ。

この記事によると、井原西鶴は本名を平山藤五といい、大坂の裕福な町人であつたということになる。井原・平山の両姓を名のるのはおかしいようであるが、当時であつてはさほど珍らしいことでもなかつた。西鶴は武士出であると、一時は真面目に考えられたこともあつたが、それが誤であることは、この記事によって明らかである。

西鶴がいつどこで生まれたかは明記されていないが、元禄六年八月十日、享年五十二歳で没しているので、それから逆算すれば、寛永十九年（一六四二）に生まれたことになる。他所で生まれて大坂に足を留めたという説がないわけではないが、西鶴の「団袋」の序や、団水の「こゝろ葉」の序によって、難波の産と確認してよいであろう。もっともその生家が**大坂の何町であつたかは明らかではない**。水雲子撰の「中難波すゞめ」（延宝七年刊）に「鑓屋町 井原西鶴」とあ

って、その頃鐘屋町に住んでいたことは明瞭であるが、そこは屋敷町に接した淋しいところであったというから、生家は別にあつて、そこで商売を営み、西鶴は鐘屋町に庵を結んで、閑居していたのかも知れない。

「妻モハヤク死シ」とあるのは、延宝三年四月三日に、二十五の若さで妻の死んだことをいう。西鶴は三十四歳であつたが、妻の死をいたく悲しみ、郭公独吟千句を手向け、「諸独吟一日千句」と題して上梓した。その序文や句によつて、西鶴の妻はその年の初め頃からかりそめの風邪の心地で病臥し、四月三日に死没したこと、享年二十五歳であつたこと、あとにはまだ幼少な三人の子が残されたこと、菩提寺誓願寺に葬つたことなどがわかる。

脉のあがる手を合してよ無常鳥

次第に息はみじか夜十念

沐浴を四月の三日坊主にて

などの句を見ても、死に瀕した妻の病床を見守る西鶴の悲痛な姿が想像されるのである。

「一女アレドモ盲目、ソレモ死セリ」とあるのは、三人の遺児の一人で、それは元禄五年三月二十四日に没した光善心照信女のことであろうと野間光辰氏は「西鶴年譜考證」で述べておられる。なお明和七年刊行の「絵本舞台扇」には、「摂陽西鶴孫東鶴」という署名がある。東鶴は松村氏、赤松堂と号し、祇空の門人として俳名の知られていた人である。西鶴に東鶴という孫のあったことは、早くすでに宮武外骨氏や尾崎久弥氏によって紹介されたが、野間氏もそれは必ずしも疑うべきではなく、元禄五年に没した盲目の女子以外に、二人の子供があり、そのいずれかが松村姓に養子もしくは婚姻して出生したのが東鶴であつたと考えることも可能であるといつておられる。

西鶴は三十四歳で妻に先立たれ、後妻をめとらずに、それからはむしろ自由な生活をしていたようである。「見聞談

叢」に「名跡ヲ手代ニユヅリテ、僧ニモナラズ世間ヲ自由ニクラシ云々」とあるのは、その間の消息を伝えたものである。愛妻に死別して、家業にいそしむ意欲もなくなってしまったのであろう。商売の跡目は手代に譲り、半僧半俗の姿で諸国を遊歴していた。「行脚同事ニテ頭陀ヲカケ」、半年も歩き廻って宿へ帰るといふ有様であった。延宝五年三十六歳の冬には既に法体になっていたが、もとより僧籍にはいつて悟り澄ましたわけではなく、気軽な身になって粹坊主の名をほしいままにしていたのである。そうした遊歴の間に諸国の遊里の実情をさぐり、怪談異聞の蒐集にもつとめ、後年浮世草子制作の材料を積んで行った。元禄二年刊行の「一目玉鉉」は序文にも見えるように、奥州日の出の浜より遠く西国に至る名所案内記であるが、それは西鶴自身の足跡を示すものであった。

団水撰「西鶴忌こゝろ葉」は西鶴の十三回忌に手向けた句集であるが、その中に、

井原入道西鶴は風流の翁にて、机に蘭麝を這し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさとりて俳諧の通達なる事、浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ。下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯て人に喰せて楽しむ。お

もへば一代男

幾秋を生て居やらば下手である 湖梅

とあるが、西鶴の平生の生活がほぼ想察されるような気がする。妻に死なれてからは、諸所の遊里にも出入りしたであろうが、下戸であった彼は前後不覚に泥酔するようなことはなく、どういう場合でも冷静な目がひらいていた。草庵にある日は机に名香を炷き、釣舟に四季の花を咲かせるといふような風流な生活を送り、訪客を喜び、御馳走をして楽しむという風であった。「おもへば一代男」であって、妻の死後は終生めとらず、気ままな生活を送っていたのである。

西鶴の風貌については、幾枚かの肖像が残っているもので、大体見当をつけることができる。最も若い像は延宝元年三

十二歳の時に上梓された「哥仙<sup>大俳諧師坂</sup>」所載のものである。「長持に春ぞくれ行更衣」の句を題し、「鶴永」と署名してあって、像は黒羽織を着し、紐は当時の流行に従って胸高に結んでいる。眉は尻上りに秀で、目は理知的で神経質なところが見える。もちろん鬚はまだ落していない。新進気鋭の風貌がよく写されている。次は天和二年四十一歳の正月上梓された「俳諧百人一句難波色紙」所載の肖像で、これには鬚はなく、白羽織に黒小袖を着した大入道が、大脇差を横たえて坐っており、上には「烏賊の甲や我が色滴す雪の鷺 難波西鶴」としるされている。四十歳前後の西鶴の面影がよく写されているようである。

元禄六年西鶴の没後間もなく出版された「西鶴置土産」の巻頭にも肖像と辞世の句がのせられている。その像は浜床に坐し、脇息によりかかり、前には硯と短冊を置き、筆を手にして句案しているさまである。老来主角のとれた円満な風貌ではあるが、眉や目つきなどには若い頃の鋭さが残っている。上部には、

## 難波俳林

松寿軒 西鶴

辞世 人間五十年の究りそれさへ

我にはあまりたるにましてや

浮世の月見過しにけり末二年

元禄六年八月十日五十二才

とあって、信徳・言水・才麿・団水等の追善の発句が収録されている。翌年元禄七年には置土産の改題本「<sup>西</sup>彼岸桜」が江戸で刊行された。これにも西鶴の肖像がのっているが、この像は全くこしらえものであって、品位や風格において

置土産所載のものに比べて遙かに劣っている。

これらの諸書に載せられた肖像以外に、芳賀一晶描くところの絹本着彩の像がある。久保貢氏の所蔵であるが、既に「日本古典全書」の「井原西鶴集」その他に紹介されている。一晶は京都に生まれ、後江戸に居住した医者であり、また俳人でもあり画家でもあったが、西鶴とは相識の間柄であつたらしく、この像も空想の作ではなく、実際に面謁した印象によつたものであろう。花色無地の小袖に、花菱紋のついた羽織を着し、両手を左膝に重ね、扇子を前において、多少前屈みに坐っている。頭は丸く、首筋は肥え、目は大きく一点を凝視し、口は無造作に開いている。精彩人に迫るものがあり、負け嫌いで覇気に富んだ性格がありありと描き出されている。其積が粹法師といっているように、世の甘酸をかみしめた、物分りのよいくだけた人物であつたことは事実であらうが、同時に力で押して行くような油っこいところも多分にもつていたに違いない。その異常な精力が、俳諧や小説に超人的な偉業を成しとげさせたのである。

「見聞談叢」に「甚誹諧ヲコノミテ一晶ヲシタヒ、後ニハ流義モ自己ノ流義ニナリ、名ヲ西鶴ト改メ」とあつて、「一晶ヲシタヒ」というのは、どういう意味であるか明らかではないが、一晶は信徳や令徳に学んだ俳人であり、西鶴の像を描いたほどであるから、西鶴もその人柄を慕い、その俳風にも興味をもつていたのかも知れない。後には流義も自己の流義になつたというのは、古風の俳諧から脱け出して、阿蘭陀流の俳諧をはじめたことをいうのである。

「名ヲ西鶴ト改メ」というのは、初号の鶴永を改めた意味である。寛文六年二十五歳の時に刊行された長愛子撰「遠近集」にその発句が入集し、鶴永と号したことがはじめて見えている。西鶴号の使用は延宝三年十一月刊行の「糸屑集」をもつて最初と考えられていたが、野間氏は延宝二年の歳旦吟「俳言で申や慮外御代の春」に西鶴と署名してあることを根拠にして、その改号はその前年の延宝元年（西鶴三十二歳）の冬にすでに行われたものであると断定している。

鶴永を西鶴と改めたのは、師宗因の別号西翁の一字を取ったものと思われるが、この西鶴の号も元禄元年になって西鶴と改めることになった。それは將軍綱吉の息女を鶴姫といい、將軍はこれを鍾愛するあまりに、市井において鶴屋の家名及び鶴紋の使用を禁じたからである。そのお触は元禄元年二月と同三年二月と二回にわたって出た。西鶴もこれに遠慮して、元禄元年十一月刊行の「新可笑記」には西鶴の号を用い、元禄四年三月刊行の江水撰〔元禄四年三月刊行の〕「百人一句」に至るまで、これを使用したのである。

以上、「見聞談叢」の記事を拠り所にし、これを敷衍して、西鶴の伝記のあらましを考えて見たのであるが、次に俳諧師及び浮世草子作者としての業績を略述することにする。

いうまでもなく西鶴は小説を書く前に俳諧師として活躍した。彼が俳諧に志したのは、明暦二年十五歳頃であったと推定されている。というのは、延宝九年に刊行された「大矢数」巻四の自跋に、「予俳諧正風初道に入て二十五年」とあることから逆算すると、ちょうど十五歳頃にはじめて俳諧に志したことがわかるからである。入門の師が誰であるか明らかではないが、恐らくはじめは貞門系の俳人についたものと想像される。

俳諧の点者となったのは、寛文二年二十一歳頃であった。そのことは元禄四年刊行の「俳諧石車」に、「西鶴誹道に入て三十余年の執行」とあり、また「西鶴詞に、俳諧程の事なれども、我三十年点をいたせしに」とあることによって推定されるのである。明暦二年に俳諧を志してから、元禄四年は三十七年目に当り、「三十年点をいたせしに」という言葉を信用すれば、寛文二年頃から点者として立ったことがわかるのである。

その句は諸集にぼつぼつ入集していたが、西鶴がその一派の俳風を世間に向って大いに宣伝したのは、延宝元年（三十二歳）六月に、生玉南坊で万句俳諧を興行し、それを出版してからである。西鶴の自序によると、これより前に大坂

で万句俳諧の興行があったが、西鶴一派は阿蘭陀流であるといって、その仲間に加えられなかったということである。その頃すでに西鶴一派の軽妙な句作が、阿蘭陀流として世人の注目を引いていたことがわかるのである。生玉の興行は十二日間続いたが、出席した俳人は百五十六人に及び、その中には由平・松意・遠舟・浄久などの知名の俳諧師もあり、宗因も万句成就の追加第三に名を連ねている。

延宝三年四月、宗因が点を加えた「大坂独吟集」が刊行された。由平・未学・悦春・重安などの宗因一派の錚々たる俳人の百韻を十巻集めたもので、「軽口にまかせてなけよほとゝぎす」を発句とする鶴永の郭公独吟百韻も入集している。所々に宗因の評言をはさみ、引点六十句、長点十九句、総評にして、

ほとゝぎすひとつも声の落句なし

とや申べからん、是こそ俳諧の正風とおぼゆるは、ひがこゝろへにやあらん、しらずかし。  
と褒めあげている。

延宝四年（三十五歳）十月には「古今俳諧師手鑑」を編纂し刊行した。これは諸名家の真蹟短冊二百四十六枚を摸刻したものであって、巻頭には守武・宗鑑、次に貞徳、巻軸には宗因をすえ、西鶴自身の筆蹟は「只の時もよしのは夢の桜哉」の句が摸刻されている。俳人の真蹟をあつめた最初の集ともいふべきものであって、まことに意義の深い企てであった。

かように西鶴はその俊敏な才能にまかせて、縦横の活躍をしたのであるが、俳壇にその名を不朽ならしめたのは、矢数俳諧の興行であった。矢数俳諧というのは、一定の時間内にできるだけ沢山の句を作って、その記録を誇ることをいうのであるが、本来は京都方広寺三十三間堂の通し矢にならったものである。尾州藩士星野勘左衛門が寛文九年に通し

矢八千本の記録を出し、天下一の名誉を博したが、西鶴はこれをまねて、延宝五年（三十六歳）五月二十五日、大坂生玉本覺寺で一日一夜に千六百句独吟を興行し、「西鶴俳諧大句数」と題して上梓した。

西鶴が千六百句独吟に成功したと聞いて、忽ち競争者が現われた。延宝五年九月二十四日には多武峰の僧月松軒紀子が千八百句独吟を成就し、翌六年には「諸俳大矢数千八百韵」と題して上梓した。延宝七年三月には仙台の大淀三千風が三千句独吟を成就し、「仙台大矢数」と題して刊行した。西鶴はこれに跋文を書き、紀子の大矢数の虚構を暴露し、三千風の興行は、これを確認した。

西鶴の記録は三千風の三千句独吟によって完全に打倒されたので、延宝八年（三十九歳）五月七日八日にかけて、生玉社別当南坊において再度の矢数俳諧を興行し、聴衆数千人を前にして、一日一夜に四千句独吟という偉業をなした。これは翌九年四月「大矢数」と題して上梓されたが、卷之一巻頭の発句は、

天下矢数二度の大願四千句也

となっている。大矢数役人として、遠舟・由平・豊流・来山・惟中など五十五人の名が掲げられているが、仙台の三千風、江戸の松意・信章（素堂）・不卜、大垣の木因などもわざわざ参会したということである。とにかく甚だ大がかりな、人の耳をそばたせる興行であった。

西鶴は四千句独吟では満足せず、貞享元年（四十三歳）六月五日には、摂津住吉の神前で、さらに大がかりな興行を計画し、終に一日一夜に二万三千五百句独吟という超人的な記録を樹立した。二十四時間にこれだけの句を吐くためには、一分間に十六句の速さで吟詠しなければならない。これは殆んど人間の能力を絶した曲芸である。それにこの独吟は今日伝わっていないので、虚構の宣伝であったと疑われもした。しかし西鶴十三回忌追善集「こゝろ葉」をはじめとして、

二万三千五百句独吟を証明する句集は少なくない。由平・惟中・来山・万海・旨恕・友雪など、その日に列座した俳人の名も伝えられている。江戸の其角も来合わせて、親しく当日の模様を見、「五元集」に、

住吉にて西鶴が矢数俳諧せし時に、

後見たのみければ、

驥の歩み二万句の蠅あふぎけり

の句を収めている。その独吟が残らなかったのは、記載する暇がなかったからであって、ただ紙上に棒を引いて数をかぞえただけであった。

二万三千五百句独吟というのは恐らく事実であって、西鶴はそれより二万翁・二万堂などの別号を用いた。まことに驚くべき神業であるが、軽口狂句を本体とする西鶴の俳諧からすれば、それは必然的な発展であった。こういう遊戯的な興行から、芸術的なものを要求することはできないが、競争相手である貞門の俳人を沈黙せしめ、談林派の拡張に役立ったことは事実である。古風の俳諧に対して自由無碍な新風を宣伝するという意図が、こういう試みに含まれていたことは否定ができないのである。

西鶴一派の俳諧は、世間から阿蘭陀流であるといつて邪道視された。そのことは延宝元年（三十二歳）生玉南坊で催された万句俳諧の西鶴の序にも見えている。世人が阿蘭陀流などと輕蔑して、今まで自分達を仲間に入れてくれなかったといっているのである。貞門の人たちは談林の俳人は無学であつて、指合や去嫌をゆるがせにし、本歌や古事をほしのままに卑俗化すると思つていた。そしてそういう邪俳の急先鋒は西鶴であるといわれていた。西鶴は古人の糟粕をなめることをいさぎよしとせず、自分の思うこと、感じたことを気軽に調子よく表現するのが俳諧であると信じていた。即

興即吟こそ俳諧の生命であると考え、従って大矢数のような離れ業もできたのである。そしてしまいには世間の惡罵を逆用して、わざと自分の俳諧に阿蘭陀流の名を冠し、延宝六年刊の「三鉄輪」の序などでは、

阿蘭陀流といへる俳諧は、其姿すぐれてけだかく、心ふかく詞新しく、

などといって、その一派の俳諧の特質を積極的に主張しているのである。

かように談林が勃興し、俳壇を風靡するようになると、貞門の俳人もだまっているわけにはいかない。論難攻撃の書が次々に出て、俳壇は奇観を呈したのであるが、延宝七年十二月、京の中嶋随流は「俳諧破邪顯正」を出して、宗因を「紅毛流の張本」と罵り、「當時宗因流をまなぶ弟子、数多ある中に、殊更すぐれて相見えしは、江戸は不知大坂にて、阿蘭陀西鶴」であるといっている。宗因の門人の中でも西鶴が殊に光っていたことは、この一文からも察せられるのであって、彼はそれを名譽なことと思って、俳壇をあげまわっていたのである。

西鶴の俳諧は宗因よりも一そう放埒であると、随流から罵られたのであるが、實際彼はかなり大胆な表現をしている。

なんと亭主替った恋はござらぬか

きのふもたはけが死んだと申（大句数）

分別どころ袖のとめ伽羅

今晚の床はふらうかふるまいか（大矢数）

蟲貞があつてあんな男を

縁組も銀が敵のうき世也（大矢数）

というように、市井の情事や放蕩的な気分が自由に取り込まれており、また町人生活の悲喜さまざまな姿がよみこまれ

ている。大矢数の跋文でも、百韻一卷に年月を費すようでは駄目であるといっているのであって、何事も即興的に口述に依つてのけるのを理想とした。彼は貞門によって開拓されなかった新しい分野をきり開こうとし、古典趣味に囚われずに、生き生きと動いている巷の生活に材を求め、人生の表裏に触れようとした。そこで遊里の生活や歌舞伎の世界が盛んに俳諧に取り込まれた。その俳諧を通して雑然とした世相の動きが看取され、人間生活の種々相が露骨に解剖されているのに気付くのである。時には猥雑俗悪な句もあるが、中には人生の機微をうがったものも見られる。こういう俳諧の中から、好色本作家の西鶴がだんだん生長して行つたのも偶然ではなかったのである。

西鶴は天和二年（四十一歳）十月、「好色一代男」を述作した。これは西鶴の小説における処女作であるが、西吟の跋文などから考えて見ても、初めから作家として世に立とうというような野心的な意図で書かれたものではなさそうである。ところが結果から見れば意外な成功であった。好色とか当世風という意識は仮名草子にもなかったわけではない。しかしそれは教訓性や実用性によってしばしば濁らされていた。西鶴は仮名草子に含まれているさまざまな夾雑物をふりおとして、現代の世相をするどく描写しようとした。構想の上では、源氏物語や浮世物語などの影響が認められるであろうが、内容はどこまでも当時の享楽生活を具体的に浮き彫りにしたものである。こういう描写の態度が在来の作品に対して、明らかに一線を劃したのである。

好色一代男が作者も予想しなかった程の好評を得たので、西鶴はつづいて「諸艶大鑑」（好色二代男）を発表した。一代男は俳諧師の余技に過ぎなかったが、二代男になると、奥付に「世に慰草を何がたと尋ねて」とあることから察せられるように、作家的な意識が一步前進していた。続いて「好色五人女」「好色一代女」「好色盛衰記」（元禄元年刊）などを発表した。いずれも官能の匂の高い作品であって、その時代の理想的な遊女や、典型的な放蕩児や、熱情的な巷の女

が大胆な筆致で描き出されている。

もっとも西鶴は単純な性慾を描くだけで満足していたわけではなく、もう少し複雑な情生活に触れようとした。世之介の後半生を見ても、それは情と張をもった遊女を相手に、遊廓特有の情趣を味わおうとする生活であり、五人女の中にも感傷的な場面が見られるのである。しかし大体からいって、西鶴の好色物に現われた情生活には、かなり積極的なものがある。そこにはやはり時代精神の反映が見られるのである。町人が勃興したといっても、階級制度の拘束から免れるのは困難な時代である。そこで町人は金力を利用して情痴の巷に走ったのであるが、その享楽生活には、かなり徹底的なものがあつた。世相の表裏に徹した西鶴が、町人生活の実相に触れ、その意欲を代弁しようとしたのは、むしろ当然であつたといえよう。

好色物において性生活の種々相を眺めた西鶴は、「本朝二十不孝」（貞享三年刊）と「男色大鑑」（同四年刊）によって、作品の方向に一転化を試みた。中国の二十四孝の話は室町時代に和訳されてから、広く流布し、仮名草子にもこれを主題にした作が見られる。本朝二十不孝はその伝説の裏をかこうとしたものである。この作品には不倫な人間の生態がまざまざと描かれている。むしろ病的ともいふべき西鶴の強靱な性格は、この作品において人間の悪と醜とをまたたきもせず直視しようとしている。好色物では材料にやや囚われた傾きがあつたが、この作になると、彼の特長ともいふべき客観的態度が、かなり冷静に保たれているのであつて、その点では一段の進境を示しているといえるであらう。男色大鑑は、前半は武士の念友関係を取り扱い、後半は若衆野郎に絡る情事を描いている。義理・嫉妬・執着・怨恨に彩られた同性間の愛情が、極めて複雑に取り扱われており、心理描写もかなり鮮やかである。若衆野郎の色恋には優艶なところがあつて、好色物の名残をとどめ、武士の念友関係には殺伐な気がただよい、武家物への発展を示している。